山里暮らしの想い出　50　　2018.5.10.

書くことは自己実現のため

里草会顧問　**福井正樹**

はじめて手紙を書いたのは、小学校の 2 年生くらいだったと思う。叔父が机に向かう後ろから丁寧に書き方を教えてくれた。まず時候の挨拶、と言われても何を書けばいいのかわからない。口移しで、「苗が育ってきています」などと例文を教えてもらいそれを書いていった。そして相手の安否を伺う、というのは「お元気ですか」などなど。次にこちらのみんなの様子を報告する。それからが本文で、ここには小包が届きましたとか、雑誌をありがとうございましたなどと手紙で伝える理由を書いて行くのだという。

最初は書くのが嫌だったが、毎月小包が届くのでどうしても礼状を書かねばならないように義務付けられた。手紙のあて先は叔父が書いて、その封筒に自分の手紙も入れ、私のも入れて定時制高校に行く時投函してくれていた。やがて叔父も邪魔くさくなって来たらしく、自分で書いて自分で小学校のそばのポストに入れることになった。仕方なく書く時期が続いていたが、ここに欲しいものを書くとたいがいのものはそのうちに送ってくれることがわかってきて、書こうとする意欲がわいてきた。

昆虫図鑑は買ってもらっていたが、その巻末に標本の作り方が示されていて、虫ピンや展翅板が必要なことが書いてある。これらは田舎では手に入らないので欲しいというと母は誰かに聞いて買い求めて送ってきてくれた。それを使って見よう見まねで夏休みの宿題に昆虫を標本にして出したら金賞になった。４年生の夏休みである。

今度は得意げにその報告をする。母からは手紙など来ないが、必要なことは小包の中にメモ的に入っている。私の手紙は必要に迫られてだんだん上手になっていった。休みの時など母の所に行ったら同僚の人達から「あんたの手紙見せてもらった。ほろりとするようなことが書いてあった」などと言われたので、母なりに自慢げに手紙をだれかれとなく見せていたのかもしれない。

どうしても欲しいものがあるとあらゆる必要な理屈を丁寧に書くことになる。記憶に残っているのは６年生くらいの時に空気銃を買ってくれと頼んだ手紙だが、これは買ってもらえなかった。村の中で若い人が持っていたし、同級生のうちでも撃ち方を教えてもらったりしたので、とても欲しかった。

今にして思えば、顔を合わして直接ねだると気分をぶつけ合いお互いに腹が立ったり感情的になってすねたりすることもある。手紙で訴えるには冷静に気持ちを整理しなければならないので露骨な感情が入り込まない。直接話すよりタイムラグがあるから気分の昂ぶりを鎮静させる効果がある。身近な相手とは、手紙でやり取りしたほうが感情の行き違いが抑えられる。

当時は時間が有り余るほどあった。子供の雑誌に投稿して昆虫を趣味にする仲間を探したらだんだん増えてきた。中学生の時には北海道から沖縄まで２０人くらいと文通していた。手紙が来るのはうれしいことだし、未知の環境の人達と情報交換するのは好奇心を刺

激する。当時返還されていなかった沖縄の友達からは、米軍の基地反対などの闘争の様子も届いたが、平和な山里では想像もできない世界があるのを感じた。

文通相手が増えて、何通もの手紙に同じようなことを書くのも大変だし、他の友達から来た内容も仲間に紹介したいので機関誌のようなものを作りたいと思った。当時はコピーなどなくて、ミニコミに使えるのは謄写版である。

謄写版は日本人の発明だそうだ。蝋を浸み込ませた紙を鉄のやすり板の上に置き鉄筆で文字など書き、その上からローラーでインクをしみこませて何枚もの複写をつくる。線などを引くとそこが切れてしまうので、特殊なやすりが必要だ。最初は叔父が一部を作って学校で印刷してくれたが、そのうち自分でも謄写印刷の原紙を切ることができるようになる。書いた段階では読めても、ローラーでインクを載せてみると字や線が消えたりにじんだりで、蝋紙にしわがよれば全部がゆがんでしまう。印刷にも相当な熟練を必要とした。いま残っている中学の頃の昆虫の機関誌の文字は読むに堪えない代物である。

相当悪戦苦闘を繰り返したが、特殊な道具や技能も会得して高校の頃には明朝やゴチックを書き分けたり色刷りで冊子も作れるくらい上達した。高校の文芸部であるはずの金が足りなくなっていた。誰かが使い込んだのであろうが皆の責任だ。てんでに作品を書いて、私が何日か半徹夜してガリを切り、みんなも泊まりこんで色刷りの印刷と製本をした。この文集を５０円で手分けして学校中に売りつけると先生も買ってくれ、穴埋めするだけの金が集められた。当時ラーメン一杯５０円だった。

だれでもそんな時期があると思うが、詩を書いたり創作をしたりして、仲間内で発表できるようになるとより良いものを書いてみようという意欲ができてくる。いま読み返してみると気恥ずかしくて身が縮むが、作文や詩や小説や戯曲や交換ノートなど手当たり次第に書き綴っていたものだ。今でも書くということは苦にならないし、むしろ書き綴ってゆくことは楽しいと思う。

大学生の２年目は６０年安保闘争の時代であった。街の大学でみんなが騒いでいたら同調しなかったと思うが、なにしろ丹波篠山の環境なので日本中が湧きかえっているのに何の反応もしないしもどかしい。京都などの大学生と活動に参加しながら、私も謄写印刷でビラを配り学習会を呼び掛けた。支援してくれる先生もいてわざと５分くらい遅れてきてもらい各教室でビラを配り集会を呼びかけた。仲間が集まってきて私が自然にリーダーになり、盛り上がってくると同志的な連帯もできる。

そして安保条約が６月に自然成立し、岸首相から池田内閣に政権交代した時には深い挫折感を味わった。その夏には三井三池の炭鉱闘争などに仲間とともに総評の一員として参加して社会とかかわってゆく。総評は各地から列車を仕立てて労働者を送り込んだ。秋の大学祭には炭鉱の悲惨さを戯曲にして訴えようと、私が脚本を書いて演出した。

時間がないので粗筋と資料を傍に置き、謄写版の原紙に直接ほとばしるまま感興を書き綴った。安保闘争で集まった仲間を出演させ舞台装置も作った。上演の時は照明を扱いながら、自分の作と演出なのに感動してなぜか涙がにじんできた。